

館蔵「天文学関係西籍二点」

天動説と地動説

短期大学部教授（中央図書館稀覯書室兼任） 河合忠信

このたび本学で天文学会が開催されるに際し、学会の要請により本学中央図書館では館蔵の西欧古版天文学関係書の展覧を行うことになった。展覧書目録は別掲のとおりだが、ここでそれらの中より二点を選び若干の解題を試みた。

1. レギオモンタヌス（ヨハン・ミュラー）
「アルマゲスト注釈」
ヴェニス，1496. Regiomontanus, I. “Epitoma in Almagestum Ptolemaei” Venetiis, 1496.

アレクサンドリアのムセイオン付属天文台の研究員であったといわれる著名な天文学者、地理学者プトレマイオス・クラウデオスはヒッパルコスを中心とする当時のギリシア天文学を、一貫した天動説体系のもとにまとめ、その理論を集成した書「メガリー・シンタクシス」（大集成）を著した。この書は後アラビア語に訳され「アルマゲスト」の名で知られ、長く後世に大きな影響を与えた天文学書である。15世紀になり、教会暦改訂問題が生じ、その問題解決のためこの古典天文書の注解、また精密な天体観測による「アルマゲスト」の改訂が当時の天文学者達によって行われ、ウィーンの大天文学者プールバッハ(1423-61)は「アルマゲスト」のドイツ語注解書を書き、プトレマイオスの弦の表を改訂したが、本書の著者レギオモンタヌス(1436-76)はその弟子で、師の没後ローマに留学、帰国後1471年にニュールンベルグに天文台を設けて天体観測を行い「アルマゲスト」の天文常数の改訂に努力した。時あたかも15世紀の半ば、グーテンベルグによって活字印刷術が発明され、彼はいち早くこの印刷技術を利用して天文書の出版、天文学知識の普及に力をつくした。

本書もその一冊で、1496年ヴェニスで刊行された伝存稀なインキュナブラ(15世紀刊本)の一点である。なお、コロンブスが航海に用いた暦表も本書の著者によるものであった。

2. コペルニクス「天体軌道運行について」
ニュールンベルグ 1543.
Copernicus, Nicolaus. “De Revolutionibus Orbium Coelestium, Libri VI”
Norimbergae, 1543.

聖職者、医者として生前活動していた本書の著者コペルニクスに大天文学者、地動説の提唱者としての名声をもたらしたのは本書であろう。前後九年にわたるイタリア留学中に著者はこの地動説の芽を育んだといわれている。皮肉なことにこの書の見本刷がニュールンベルグの印刷所から彼の許に届いた時、1543年5月24日、著者は臨終の床にあった。

本書は、標題に「トルニ生まれのニコライ・コペルニクス著、天球の回転について、六巻」とあり、全203葉、うち196葉が本文、巻末の1葉が正誤表、あとの6葉は標題、無署名序文、シェーンベルグのコペルニクス宛書簡、教皇パウル三世宛の献辞、目次に宛てられている。